

東西南北

2016.10.5

何とも対照的だ。「何か一つでも人のためになることができないか、いつも考えてきた」。熱帯感染症の特効薬を開発した大村智・北里大特別栄誉教授(61)は1年前、そう



東京工業大栄誉教授(71) 顔写真Ⅱがノーベル医学生理学賞に輝いた。生命活動を担うタンパク質がどうやって

できるかに注目が集まる時代に、細胞がタンパク質を廃棄し、リサイクルする仕組み(自食作用)をこつこつと解き明かした。その原動力は「生命現象の真実を明らかにしたい」という純粋な好奇心▼大隅さんの研究仲間は今回の受賞を心から喜ぶ。基礎研究の大切さを日本中に知らしめ、それに取り組む人々を勇気づけるからだ。政府の研究費や大学、企業でも目先の成果が重視される時代。「何の役に立つの?」と言われる基礎研究は肩身が狭い。ノーベル賞の選定ですら応用色が強まっている▼大隅さんはストレートに語る。「科学が『役に立つ』という言葉が社会を駄目している。本当に役立つのは100年後かもしれない。将来を見据え、科学を一つの文化として認められる社会を願っている」▼「基礎」と「応用」は、いわば車の両輪。もつと長期的な視点から基礎研究に光を当て、若い研究者たちに「辞職作用」が起きないようにしなければ...と思う。

(2016年10月5日付朝刊1面)

① この「東西南北」のようなスタイルの新聞上の文章を、カタカナ3文字で何と呼ぶでしょうか。

()

② 大隅さんが願う社会の在り方を、本人が語ったことから短くまとめましょう。

③ この文章は、2つの「同音異義語」を活用することでより面白くなるよう工夫されています。2つの言葉を探し、抜き出しましょう。

() と ()